

大町労山だより

VOL2-NO17 2015. 810 発行

50周年記念リレー縦走・第2弾～第3行程

唐松岳～五竜岳縦走に9名 ～縦走5名・日帰り4名～

7月25(土)～26日(日)に50周年記念北ア・リレー縦走、第2弾(第3行程)の唐松岳～五竜岳縦走を予定通り行い、縦走5名と日帰り4名の合わせて9名が参加して50周年記念にふさわしい盛り上がりを見せました。

リレー縦走は引き続き、第3・第4弾へと引き継がれ、いよいよ佳境へと入って行きます。縦走とは銘打っても、日帰りの部分参加やピストン参加もあります。より多くの会員の参加で50周年記念行事を成功させようではありませんか!!

●第3弾～第2行程 大雪溪 - 天狗山荘 - 唐松岳 - 八方尾根

日時; 8月22日(土)～23日(日)予定ですが、確定していません。行ける方は連絡下さい。

●第4弾 夏山合宿 日時; 8月28日(金)～30日(日)

28日(金) 新穂高⇒わさび平⇒鏡平⇒双六小屋(泊)

29日(土) 双六小屋⇔双六岳⇒樺沢岳⇒千丈沢乗越⇒槍ヶ岳山荘⇔槍ヶ岳(泊)

30日(日) 槍ヶ岳山荘⇒飛騨乗越⇒槍平小屋⇒滝谷出合⇒奥穂登山口⇒新穂高
参加申し込みは8月15日までに会長または事務局長へ

恒例の夏山合宿はリレー縦走の第4弾として8月28日(金)～30日(日)に行われます。新穂高から双六岳 - 槍ヶ岳を結ぶ夏山合宿は、2年連続して中止となっており、大町労山にとっての宿願です。また50周年記念リレー縦走のハイライトとも言えます。バリエーションルートの参加を含めて多数の参加を以て、大町労山これにありをアピールしようではありませんか!!

なお、2泊できない方は、前半(双六ピストン)または後半1泊(新穂高から槍、下山同じ)でも可能です。できるだけ大勢参加しましょう。

●第5弾～第4行程 遠見尾根から五竜・鹿島槍・赤岩尾根

日程; 9月～詳細未定

7月12日以降の山行報告

7月11日(土)～12日(日) リレー縦走第1弾 梅池 - 白馬三山: 鈴木 横田

7月18日(金)～20日(日) 爺ヶ岳 - 鹿島槍ヶ岳 鈴木+2

7月19日(日)～20日(祝) 新超乗越 - 針ノ木岳 - 蓮華岳; 内藤 +2

7月19日(日)～23日(木) 猿倉 - 白馬・唐松・・・爺 - 新越・柏原新道: 勝野

7月19日(日)～23日(木) 月山 朝日岳 谷口 宮島 +佐久4

7月24日(金)～25日(土) 岩手山; 宮島

7月25日(土)～26日(日) 北ア・リレー縦走第2弾～第3行程～詳細略

7月26日(日)～27日(月) 富士山訓練山行; 鶴川(栄子) + 県女性委員会5人

7月29日(水)～30日(木) 白馬三山縦走; 内藤 +2

▼当面の山行～リレー縦走・合宿を除く

7月30日(木) 岩トレ(大町ゲレンデ); 鈴木

8月1日(土)～3日(月) 剣岳; 鈴木 他

8月7日(金)～9日(日) アルプス冒険学校(梅池⇔白馬岳); 森田 中学1 大2

▼県連・秋の交流山行; 槍ヶ岳 - (西鎌尾根) - 双六岳縦走

大町労山夏合宿と同じルートで逆回りです

- ・日程; 9月11日(金)～13日(日) ※9月5日(土) ミーティングあり
- ・参加対象; 労山会員で9月5日のミーティングに参加できる人
- ・締め切り; 所定の申し込み書にて8月21日(日着)までに申し込むこと。

▼北信越ブロック交流登山 in 石川

10月3日(土)～4日(日) 白山 雨天決行

申し込み; 7月末 詳細は事務局に

緊急事態!! 心疾患による事故死相次ぐ ~全国連盟より~

いつも労山活動ご苦労様です。7月15日付で発送した文書にも記載しましたが、7月4・5日の二日間に会員3名が山行中に心疾患で死亡しました。さらに7月14日に個人会員が越後駒ヶ岳で亡くなりました。3名で登山していて、途中で同行2名に先に小屋へ行ってもらい単独になったところ13時頃、心疾患で死亡。17時頃、下山中の別の登山者に発見されたそうです。他に熱中症でヘリで救助されるなど、猛暑による事故が多発しています。中部山岳地域など梅雨明け後の好天に恵まれる今週末ですが、自分はもちろん同行者の体調管理、会員の山行管理に、より一層の注意喚起をお願いします。

資料送・配付

平穏 26 年度中における山岳遭難の概要~

警察庁生活安全局地域課および全国連盟遭難データ

⇒ ⇒ ⇒ 熟読して下さい

新会員さん紹介 古畑 文子さん

昔々、労山一般募集山行『バスハイク』で雨飾山に登ったのがきっかけで入会しました。20周年記念登山では利尻山に登りました。

出産を機に退会していましたが、30年ぶりにまたお世話になります。

今年は50周年と言うことで、北アルプスリレー登山に少しでも参加できればうれしいです。

体力に見合った山行を楽しみ、長く続けて行きたいと思っています。よろしく願います。



大町労山 2015
創立50周年記念

北アルプス縦走
白馬岳→焼岳

唐松岳~五竜岳縦走(7・25~26) 参加者ひと口感想

谷口伸二さん

快晴の天気にも恵まれ、全員予定通りの行程を、予定より早く歩き、無事下山しました。次回も楽しみです。

五竜テレキャビンからの山行

細田 郁子

8月26日AM7時半のテレキャビン運転開始に合わせて、5時半に出発。本日は、五竜岳からの縦走組と途中で合流するために、一人で五竜テレキャビン駅からの登山。

案内など、ざーとは読んだものの、到着までは、かなり不安。

早めに出たおかげで、テレキャビン運転と同時に乗車。

と、電話で、五竜登山組から「ただ今、山頂とのこと」。小遠見まで行かないうちに、合流かと、かなり焦る。

でも、来たからには、登山を楽しまなくちゃと、気を取り直して、登り始める。遊歩道の周りは、お花畑、天気は、快晴。気分は上々。

小遠見までは、雄大な山の景色を楽しみながらひたすら登る。

しかし、暑い、じりじり照りつける太陽、汗は流れるようだ。水分補給をしながら登る。

小遠見、中遠見、大遠見。「あれ、どこかで、行き違ったのかな」またまた、不安になる。

携帯電話、音信不通。ますます、焦る。もう少し先まで行ってみよう。

西遠見ノ池、雪が残っていて、涼しく気持ちがいい。

「ここで、会わなけりゃ大遠見まで帰ろう」そう思って、休憩していると、目印の青い手ぬぐいの、谷口さんが、視界に入った。

「良かったー！」本日最大のテンションで、皆に行き会う。

そこからの、下りは、長かった。どれだけ、登りは、無我夢中だったのか。雄大な山々とお花、出会いの喜び。とても感激の多い一日でした。(次は、山頂を目指すぞー！)

山岳会を考える

鈴木 均

先日、労山ではない、ある山岳会に所属する大阪の二人を連れ、種池小屋テガをベースに爺から鹿島槍をピストン縦走した。一人は、テント泊はもう2回目、昨年槍沢から槍へ単独で登ったという50歳の男。もう一人は、テント泊はもちろん北アルプスが初めてという56歳の女性。どちらも山の経験は2~3年程度らしい。

女性の方は、現役時代の先輩の娘さんで若い頃から多少知っていたので、山案内を了承した。ところが、山につきあってほしいと電話が来てから、何回か話したがどうもかみ合わない。何がかみ合わないのか、結論から言うと彼らの会は、250人ほどの会員数を誇るが山行は、ほとんど日帰りハイキングで交通手段は電車が多く、食事も当然個人個人で準備するからパーティという意識はほとんどなく、参加する会員も連れて行ってくれるという程度の参加だということだった。

最初は、今回の山行を唐松から五竜縦走を考えたが、大阪からの高速バスで往復するダイヤを考えると、きわめて中途半端な行動になるので爺から鹿島槍を提案した。当然二人は小屋泊まりするものと考え、金のない自分はソロテントだよとメールすると、「自分たちもテントにしたい、二人用のテントを持って行くからそちらはソロをお願いします」ときた。「そんな不合理なパーティはあり得ない、どうしてもテント泊をしたいなら、こっちに4人用テントがあるから準備はこっちです。食事はそっちで考える。例えば鍋でもなんでもいい」とメールしたら、鍋の材料を買いに行く時間がない、夜は2回とも(味付け)α米とスパゲッティかラーメンで朝は2回ともパンでいきたい」との返信。「ご飯を食べないとパワーが出ない。いくら山でも、朝夜とも2回も同じメニューでは芸がない。入山前に装備も含めて点検する。こっちはこっちで必要と思われる食材等を準備する」と再送信したが、結局本番はその通りになった。言葉やメールではなかったが、彼らの感覚は、自分の分は自分で用意して食べるのだから、そっちはそっちのいいようにしてほしいということだったのだ。それがわかったのは、テントに入ってからだった。

私は、何回かの電話で、どうも釈然としない「何か」を感じていた。それが、実際に山行して初めてわかった。つまり、彼らは「山岳会」員であるが、泊る山行はほとんどないが、ある場合は山小屋やホテル、テント泊する場合は現地の登山口。ほとんどツアーに近い「会山行」で、私をうちのめした決定打は、「副会長に聞いたら今回の山行計画は会に出さないでくれ」と言われたということだった。回が企画した以外の個人山行は会では把握しないということだ。当然保険等は適用されない。そのための保険は自分で別に入っている。こんな山岳会があるのかと愕然とした。私の認識不足だった。個人山行で何かアクシデントがあっても、会は知らない、それをもって「自

己責任」と称しているとのことだった。

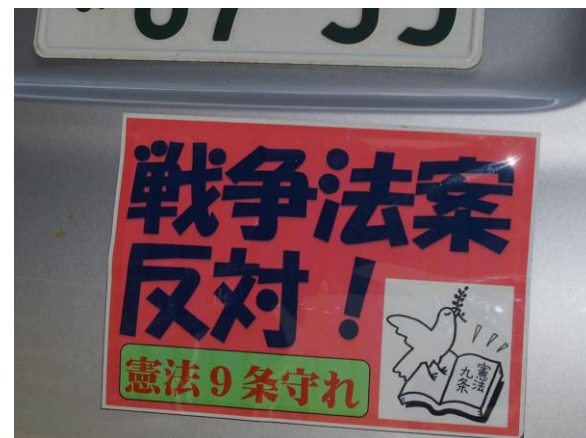
初日は雨予報で仕方がないが、二日目と三日目は晴れか曇りだろうから、まあつきあうかと言う程度で、今回の山行にはあまり気乗りがしなかったが、結果的に二日目もほとんど雨で、稜線すらほとんど見えず、剣も鹿島槍すら見えないまま時々小雨の中を鹿島槍までピストンして下山したが、天気はともかく、二人との関係は最初から最後まで違和感を拭えない、後味のすっきりしない個人的には異例の山行になった。雷鳥にも遭遇し、二人は今回の山行を喜んでだったが、長野駅まで送っていった後は精神的疲労がどっと出た。以前、別の知人を白馬周辺の観光案内したときのほうが、よほど納得できた。

200人も超える「会」では、会員はツアーより安い程度の理解の人が多いようで、こういう会もあるのかなとは思ったが、それを間違っているということとはできない。下山した翌日彼らの会のHPを開いたら、年間の山行回数は確かにすごく多い。毎週複数以上の山行があるが、ざっと見て95%位が日帰りハイキングで、近郊のスケッチ(山ではない場合もある)など山行とカウントしていいのか疑問に思うものもある。当然というか雪山や岩を伴う山行は皆無に近い。「登山文化の違い」といわれればそれまでである。

山岳会は、「3人よれば山岳会」という言葉もあるくらいに、その歴史や日常の山行などカラーがまちまちであり、基準はないとも言える。いま、山岳会の中身より組織された登山者と未組織の一般登山者と大きく区分され、遭難事例等でも比較されたりすることがあるが、山岳会は入ってみなければわからないものがあるのも事実だ。

大町労山も様々な課題があると思うが、最大の課題は会員拡大ではないかと思う。

話題は変わるが、最近私は写真のようなマグネットを車に貼って走っている。後続の車や駐車しているときにしか見えないが、いま国会で問題になっている安保法案には黙ってられない、ささやかなアピールである。「平和でこそ登山ができる」私の一つの信念でもある。教え子を戦場に送った先輩の悲痛な思いを少しでも継承し、4人の男の子と3人の女の子の自分の孫たちに悲しい思いをさせたくないからだ。



機関紙発行改革の提言(1)

機関紙担当 森田 義彦

大町労山便りの発行に携わって1年と5ヶ月が経ち、通算の発行数は17号を数えた。毎回毎回、多くの方の山行記録や連載記事、提言や報告等の原稿を頂き、担当者はそれらを編集し発行しているだけであり、今日までの機関紙の発行を支えてきたのは、それらの原稿を寄せて下さった会員の皆さんのお力添えと、山行活動や会の運営に勤しんで下さる会員諸氏の日々たゆまぬ努力の賜物であることは言うまでもない。

が、しかし、一方で当初から感じているモヤモヤ感がぬぐえないどころか、最近それが増大している気がしている。

自分が機関紙の発行をやってみたいと思ったのは、すべての会員さんの生の声を文にして全会員に届け、それによってお互いがどんな山行をして何を感じたかを共有することが出来、お互いの理解を深め合ったり、切磋琢磨する材料になるのではないかと考えたからである。

残念ながら、その兆候は一向に見えてこず、この点について機関紙は何の役にも立っていないのではないかと気がしている。

そのモヤモヤの最大要因は投稿者の固定化による機関紙のマンネリ化と言うことと、その対極の未だ聞こえて来ない声、見えない姿に尽きる。

機関紙をつくっても、読まれているのかさえも分からない、ましてどのように受け止められているのかもわからないのが実情で、徒労感を否認ない。

原稿を依頼するのは非常にしんどいことである。気軽に応じてくれる人もあれば、なかなか書いてもらえない人もあり、頑として書いてもらえない場合もある。書くのが苦手な人に強要するのは気が引ける。記録を書くために山に登っている訳ではないから当然と言えば当然である。

別に機関紙などなくても、日ごろから例会や様々な機会に色んな経験談を話して交流しているような組織なら、敢えて文書化する必要もないかもしれない。聴くところによると、毎週例会を行っている会もあるようで、そういう会で出席率も高ければ機関紙をつくるより、しゃべりあって経験を交流する方が手取り早くて無駄もないのかもしれないと思う。

大町労山がそういう会であれば、言うことは無いのだが、月2回の例会と拡大役員会への出席率は必ずしもよくはない。と言うよりむしろ低調だったとさえ言える。

つまり、機関紙原稿の偏りと例会参加の偏りは連動しているのではないかと、そしてそれは山行活動とも連動しているのではないだろうかと言う危惧…。そうだとすれば、ひとり機関紙をテコに会員の交流を広げ、深めると言ったところで螻蛄の斧であろう。

身の丈を過ぎた仕事を引き受けてしまった限界感をひしひしと感じ、ようやくその無謀さに気づいている昨今である…。かと言ってこのまま投げ出すつもりはない。残る任期いっぱい、最大限にあがいてみるつもりである。

担当者としての切なる願いは次のようなものである。

- ① すべての会員の声を紙面に反映させたい。何かを語って欲しい。本音が語れないとしたら、それはせつせと活動できる人向けの機関紙でしかなく、活動できない人にとって片身の狭い紙面になっているからなのではないか…。でもそういう人こそ声を上げて欲しい。
- ② 書くのが苦手なら語って欲しい。インタビューさせて欲しい。話されたことを要約して、それに目を通してOKをもらえればそれを記事にしたい。
- ③ 大町労山の歴史を知りたい。50年の歩みを知りたい。どんな人のどんな山行があったのかを知りたい。簡単な年賦でも覚え書きでも何でも良い。創立当時のことや、その後の活動を知りたい。それを知る人には語ってもらいたい。

④ 山行記録は、データーだけでもよい。あるいは写真だけでもよい。言えばきりが無いが、優先順位の高いものを並べるならこういうことになるか…。ここまでは担当者の個人的な言わば愚痴である。

次に提言を…。

現行のような一個人の担当者による機関紙の発行をやめて編集委員会方式にすべきであると考えます。

前にも書いたが、一個人の編集に委ねるとどうしても偏りが出るし、担当者の都合やその時々気分、体調の影響を免れない。

偏りと言うのは、政治的など言う意味ではなく、原稿を書いてもらいやすい人に頼ったり、安易にちゃっちゃと編集して無難に紙面をつくってしまうと言うような悪しき傾向も含まれる。それをマンネリと言っている。

その反面で、つくる紙面に対して『これでいいのか』と言う不安が常につきまとう。事務局長にOKをもらって発行しているのではあるが、やはり不安なのである。

そう言う弊害や不安を避ける意味では、担当者を複数にすると言うだけでは不十分で、委員会と言う権威をつくって、その下で発行するというシステムが要ると考える。

そしてその編集委員は、誰でもがなれるものでなくてはならない。PCが出来るとか、編集のセンスがある、文を書くのがうまい、等と言うことは、どうでもいいとは言わないまでも二の次である。つまり専門家であると言うことではなく、必要なのは『みんなの声を反映する』と言う視点と、それに徹する情熱や真摯さなのではないかと思う次第。

以下、具体的な提言は次号にて。